



コラム 花と虫と子どもと未来

4 各園での庭づくりの実践から見えてきたこと

この10年ほどの間に、園庭に生態系を再生したいという園の皆さんとつながってきました。多くの場合、僕自身のメインフィールドである「ぐうたら村（山梨県北杜市）」とその園を行き来しながら、少しずつ皆さんの園が変化してゆく（いる）様を目の当たりにしてきました。その中で見えてきた大切なことをひとつここで分かち合いたいと思います。

庭づくりや生態系の再生は、その道の専門家（業者）にお願いしたほうが早くうまくゆく。以前は、僕もそんなふうに考えていました。でも、それを敢えて自分たちでやりたいんだという園の方々につながってわかったのは、「園庭」の場合は、早くうまくいってもそのあとがどうにもうまくないという、園庭ならではの特殊事情でした。家の庭や、店舗の庭や、園以外の施設の庭であれば、専門家（業者）に設計から施工、手入れや管理を委託してしまい、庭の恩恵に預かるという図式が成り立つのですが、こと「園庭」に関しては、若い人たちがかなりヘビーユースするという特殊事情があったのです。え？ 当たり前？ そうなんです。当たり前のことなのですが、僕自身盲点だと感じましたし、保育関係者でもこの要点を見落とされる方がおられるのではないかと思います。週に一度、専門家が手入れに入っているのでは間に合わないほどに、日々若い人たちがこれでもかと植物や昆虫や土にかかわり続けるのです。世に存在する様々な庭をカテゴライズしてみても、おそらくこれほどヒトによるストレスにさらされる庭はないのではないかと思います。ですから、その庭を作ったり手入れしたりする人は、若い人と日々その庭で過ごす人であるのが、結局のところうまくゆくのだろうと思います。

もう少し話を進めます。庭を作る人と、使う人に分けることがタイプ、コスパに優れると考えることは、おそらく庭が完成するという前提に基づいています。完成する庭という考え方には、生き物やそれを取り囲む水や空気や光などが互いにかかわり合いをもちながら機能してゆくという、この地球の当たり前の原理原則が欠けています。そして、その生き物の中にはヒトが含まれているという当たり前が欠けているのです。

ホテルの庭のように、専門家（業者）に委託して設計、施工してもらった庭を、ガラス越しに眺めたり、散歩したりして楽しむのであれば、その庭は一度完成するのだと思います。その完成した庭を買い、使うということです。でも、若い人たちと楽しむ庭の暮らしはそうはいきません。葉にふれ、ちぎり、花を摘み、実をもぎ、虫を捕まえ、土を掘り、木に登ろうとする。そんな愛すべきヒトという生き物の幼な子と共に暮らしながら作ってゆくしかないのです。作ってもらって使うのではなく、作り始め作り続けるしかないのだと思います。それは例えるなら、カプラでお城を作ることに似ています。だれか上手な人に頼んでカプラでお城を作ってもらえば早くうまく作れます。でも、そのお城を使って若い人たちと遊ぶとなると、不都合がたくさん生まれるのではないのでしょうか。お城にかかわって遊ぼうとする人からお城を守ろうとする頻度が高いと、それは幸福な営みだとは言えないでしょう。お城を一から作っている大人の姿を若い人が見たり、感じたり、一緒に手伝っていたりする場合はどうでしょう？ このお城を庭に置き換えた時、そこに咲く花や、花を訪れる虫への意味づけが変わってくることは当然のこととも言えるでしょう。

当初、僕はエコロジカルな視点で園庭を作ることを意味を見出し、その実践を勧めようとしてきました。その時点の僕には、早くうまく作るために専門家（業者）に委託することは当たり前の選択肢でした。でも、それを敢えて自分たちでやりたいんだという園の方々が僕に教えてくれたことは、庭を自分たちで作り始め、作り続けるプロセスそのものが、若い人との暮らしを幸福にするんだという、園庭ならではの現実だったのです。

そんなわけで、僕はカプラのお城をゼロから積み始め、あれこれ考えながら作り続ける人を応援するような、園庭の再生方法を考えたり紹介したりしたいなと思っている次第です。